

19歳で部落問題の勉強を始め、現在74歳になるまでの55年間の体験・経験、そしてその中で考えたことを1時間半超にわたってお話いただきました。部落問題を勉強してきたからこそ「私は変わった」とおっしゃる藤田さんのお話から、その要点をまとめてみます。

○だれにも部落差別問題との出会い、体験がある。

どういうきっかけで出会ったんだろうか。振り返ってほしい。そこを、はずしたらいかん。そこをきっちりふまえることがだいじだ。幼いころ、身近な人から刷り込まれた偏見は、よほど本人の自覚的な取り組みがなければなくなる。私は中3のとき小説『破戒』を読んだ。それを読んで涙を流した私は、涙がとまったとたんに忘れていくんです。だいじなのは、忘れたらあかんことを忘れてしまうのが人間なんです。



○「部落問題を勉強するには本を読むこともだいじやけど、ともかく未解放部落へお行き」

「理屈や理論で議論するのではなく、そこに住んでいる人の胸の内にある思いや願いを聞かせてもらうことがだいじやよ」。京都にあった部落問題研究所の木村京太郎さんからそう教わった。以来このアドバイスをここに刻んできました。当初私が感じたこと、それは「部落とは何なのか」「部落差別とは何なのか」「部落問題の解決とはどういうことか」「解決の道筋は何か」ということだった。そういう中で、部落問題の解決を求めて私は苦闘しました。

○部落解放運動に携わって、身と心で学んだこと。

一つ目は「人間にとって何が大切か」を考えないといけないということ。学歴・職種・職業・肩書き・お金が大切なのか。肩書きでしゃべったらだめです。二つ目は、人間を差別する側と差別される側とに分けるのではなく「自分自身もひょっとしたら自分は人の足を踏んでいるかもしれない」ところろして生きることがだいじだということ。ところが、いつのまにか部落解放運動は人間を二つに分けるまちがいを生んだんです。差別される側は絶対的に差別される側だという物言いを続けてきたんです。

どうわもんだい	かいけつ	あゆ
どうわもんだい	かいけつ	あゆ
1871年	解放令	
1922年	全国水平社結成	
1965年	同和对策審議会答申	
	「同和問題の早急な解決は国の責務であり、同時に国民的課題である」	
1969年	同和对策事業特別措置法制定	
2002年	33年間の特別措置法終了	

○同和問題・部落問題のキーワードは“あいまい”

「部落問題とは、前近代以来（江戸時代以前から）の賤視観念と身分制にかかわって歴史的に形成された特定地域にかつて住んだことのある人びととその子孫、現に住んでいる人びとを特異視・特別視して、社会生活の諸領域で忌避（避けたり）・排除（仲間はずれ）すること」

特定の地域とはどこかもわからない。同和地区出身者とは何をもってそう言うのか。根拠となるものはない。それをはっきりさせたのが同和对策事業。地区指定をしたんです。あいまいなものをあたかも実態があるかのように同和对策事業が進められたんです。その結果、実

態的差別は大きく改善され、教育・啓発が進み、偏見の是正と人権思想の普及が進んだのは、それは誇っていいことだ。

○部落問題の現状をどうみるか。

しかし、大きな成果をあげた面があるにもかかわらず、マイナスイメージの克服ができていない。つい先だつての大阪・京都・姫路における実態意識調査によると「同和地区の人はこわい」が5割以上、「同和地区の人はこわいと聞いたことがある」は6割を超えている。「同和」「部落」を名乗って振るまう人と、それを聞いてだまってしまう人の関係が変わっていない。私は「たった一人の言動が、六千部落・三百万人の評価にかかわるものと心して生きよ」と教えられてきた。偏見があるのは当たり前、ひとくりにするのは当たり前。そのことを百も承知のうえで「たじろがず、向き合って、引き受ける」のが部落解放運動の行き方です。

○人間としての悲しみに重い・軽いはない。

膨大な無関心の人がいる。関心を持たない、他人事だと思っている人に、どうアプローチして心を開いてもらうか。そのときだいじなのは、心を開いてほしいと願う者が、心を開いてもらう努力せなあかんです。部落問題は、生まれ・生い立ちにかかる偏見・差別の一つです。人権問題という中に位置づけ直さないとイケない。だいじなのは、部落問題もふくめて人権問題に重い・軽いはないという視点です。優先順位を争ったらいかんです。

○人間は「生きて」いるんです。

私は、部落問題という勉強を通して「人権」にたどり着いた。そして、人権を通して「人間」にたどり着いた。あらゆる人間の悲しみとしての課題にフィードバックできるんです。少数者のことに気づかない自分がいるんです。自分が必要としないことには関心が向かないんです。人の不幸はいくらでも辛抱できるんです。自分自身も人の苦しみや悲しみに無関心でいられるかもしれない。そのことを、ここに刻まなくてはイケない。

